視点

嘔吐恐怖をもつ人へのかかわり

――当事者の抱える困難と治療

Noro Hiroshi
野呂浩史
南平岸内科クリニック

はじめに

嘔吐恐怖（Emetophobia あるいは Fear of Vomiting）とは「自分が嘔吐することや、他者の嘔吐を目撃すること、あるいは自分が他者の前で嘔吐することを過度に恐れ、苦痛を伴いながら耐え忍んでいる状態」である。本症はDSM－5において、限局性恐怖症の「その他の型」の一つに分類される。本症の特徴として、女性に多いこと、幼少期に発症した後に慢性の経過をたどること、食事摂取量の著しい減少を認めること、不安はときにパニック発作の形をとることなどが挙げられる。

本症に併存する疾患としては他の不安症群、抑うつ障害群が報告されているが、これらの中でもパニック症および広場恐怖症はとくに多く報告されている。野呂らはパニック症と嘔吐恐怖との関連性の検討から以下の三つのタイプを提唱した。すなわち、タイプⅠ：パニック発作の症状としての吐き気症状が強く、その後発症するもの、タイプⅡ：パニック発作と関係のない感冒や胃腸炎などの身体症状による嘔吐体験、あるいは窒息体験の後に発症するもの、タイプⅢ：主に幼少期に嘔吐した際の羞恥心や他者からの拒絶体験により発症するもの。タイプⅢが最も頻度が高く、併存疾患も多い。

本症をもつ人の回避の対象として、以下のものがある。酔っ払い、ノロウィルスなどに起因する胃腸炎に罹患している人、飲酒、人ごみ、公共交通機関、外食、特定の食品など。一方、安全確保行動としては、制酸剤やミントの服用、食品の新鮮さの確認、過度な手洗い、過度な掃除や食品の洗浄、自分や他者の健康の確認、迷信的行動、他者からの保証を求めることなどがある。これらの行動は、学業、就業、結婚などの日常生活および社会生活において広汎な苦痛と支障の原因となる。前述のように本症は女性に多いため、結婚や出産を躊躇する原因となり、育児への支障も大きい疾患といえる。

症例を通して当事者の困難を考える

再発した嘔吐恐怖の症例（Aさん、女性、三一歳）

①Aさんの経緯

二六歳で結婚。現在、夫と三歳の娘との三人